

2010年度入学生における「障害者スポーツ」の認識について —大学健康・スポーツ科学科において—

保井俊英*, 三上真二**
*(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)
**(大阪市長居障害者スポーツセンター)

About the recognition of “Sports for the disabled” in the entrant in fiscal year 2010 — For Department of Health and Sports Sciences —

Toshihide Yasui, Shinji Mikami

* *Department of Health and Sports, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya, 663-8558, Japan*
** *Osaka City Nagai Sports Center for Persons with Disabilities,
* Osaka, 546-0034 Japan*

Abstract

This time, it worked on the research to do the recognition investigation of “Sports for the disabled”, and to tie to “Sports for the disabled” education. The respondent to a surveys were 166 new students.

1) The student who answered that there is the disabled person in familiarity is 38 person (22.9%). Moreover, the student who participated in the volunteer who exchanges it with the disabled person is 31 person (18.7%).

2) “Often see” and “See occasionally” students are 72 person as for the television program concerning sports for the disabled person (43.4%). Moreover, “See when staying in eyes” is 72 person against the newspaper article concerning sports for the disabled person (43.4%).

3) As for sports for the disabled, “It is interested very much” and “It is interested” are 73 person (44.0%).

4) “Hoped strongly” and “Hope” the beginner’s class sports supervising instructor qualification were 56.. hope situation of handicapped person sports supervising instructor qualification.. person (33.7%), and “Hoped strongly” and “Hope” were 41 person (24.7%) as for the middle sports supervising instructor qualification. The main reason was “It was interested”, “It also wants the handicapped person to enjoy doing sports”, “I want to reserve the qualification”, and “It is useful for the future.”, etc.

5) It will be thought that the timing of the dissemination and the method become important, and it influences the number of qualification acquisition applicants and the number of students of handicapped person sports key subjects by the conclusive evidence in the future.

1. はじめに

近年、テレビ番組や新聞報道で、障害者スポーツに関する話題が取り上げられることが増えてきている。2010(平成22)年3月、カナダバンクーバーで行われたパラリンピック冬季大会では、期間中NHKが特集番組を組み放映していたことは、記憶に新しい。また、TBS系「朝ズバ」では、機会があるごとに、障害者スポーツ選手を紹介している。このように、障害者がスポーツを行うシーンが当たり前のようにイメージされつつあるようにも感じられる。

本学健康・スポーツ科学科における障害者スポーツ指導者資格認定制度中級障害者スポーツ指導員(以下中級スポーツ指導員とする)の資格取得に関する調査研究は、2002(平成14)年より進め、8年間8題にわたって報告してきた^{1)~8)}。特に2009(平成21)年度調査報告⁸⁾では、「今後の指導は、きめ細かい指導を行う必要がある。特に、指導実績を積むことについては、たとえば、多忙な学生が、授業の空き時間を利用して指導実績が得られるような、大学近辺の障害者施設等との連携、また障害者スポーツを目的としたイベントを本学健康・スポーツ科学科が開催するなど、今後多くの企画を生むようなシステムにしなければならないと考える。」と、最後にまとめた。しかしながら、この件の実現には、まだまだ時間を要するので、今後の検討を必要とする状況である。

ところで、2010(平成22)年度入学生から、本学健康・スポーツ科学科において、日本障害者スポーツ協会が提案していた資格認定制度カリキュラムの採用に伴い、カリキュラムの変更を行った。中級スポーツ指導員資格に限ると、具体的には、基幹科目である「障害者スポーツ論Ⅰ」「障害者スポーツ論Ⅱ」「障害者スポーツ指導法」3科目に、障害者スポーツ関連科目として「スポーツ文化論」「運動生理学Ⅰ」「スポーツトレーニングの科学Ⅰ」「発育・発達老化論」「救急処置演習」「健康・スポーツカウンセリング」「スポーツ栄養学」7科目からなる新カリキュラムを立ち上げた。また、活動経験については、新たな資格認定制度では「2年以上の活動経験(80時間<10日)以上)がある者」とされている。

これらの変更は、単純に考えると、従来のカリキュラムより、障害者スポーツ関連科目で4科目減、そして活動経験で5日間<40時間>減となっている。資格取得側の学生にとれば、以前より、取得しやすくなったと解釈することもできる。

2010(平成22)年度入学生には、入学時のオリエンテーション時を使って一般的な資格認定制度の説明を行い、さらに4月中旬には、中級スポーツ指導員資格制度に重点にオリエンテーションを行った。その結果を踏まえて、「障害者スポーツ」に対する認識調査を行い、在学中の「障害者スポーツ」教育に結びつける目的で、今回の研究に取り組んだ。

2. 方 法

2010(平成22)年度大学・健康スポーツ科学科入学生に対して、11項目についてアンケート調査を行なった。調査期間は7月中旬で、学科専門科目選択必修「バレーボール」の授業終了後、対象者に依頼し、出席者166名より回答があり、その結果を集計した。

3. 結果および考察

(1) 障害者との関わりについて

「身近なところに障害者がいる」と回答した学生は、38名(22.9%)であった。この割合は、2008(平成20)年度調査⁷⁾27.5%、2009(平成21)年度調査⁸⁾27.3%と比較して、低下こそしているがほぼ同割合と考えられる。身近な障害者38名とそのスポーツ実施状況をまとめた(Table 1)。祖父母を含む家族が7名、いとこなど親族が7名、友人・知人が14名、近所の人・バイト先の人が4名、無回答が5名であった。また、スポーツをしている人が13名であった。スポーツをしている関係者は、友人・知人に多く、家族や親族については、意外と少なく、各々1名ずつであった。高齢者が多いということもあるが、最も身近である家族・親族と一緒にスポーツをする機会をつくらせることが必要であると考えられる。

一方、「障害者と交流するボランティアに参加したことがある」と回答した学生は、31名(18.7%)であった。この割合は、2008(平成20)年度調査⁷⁾33.5%、2009(平成21)年度調査⁸⁾31.2%を10%近く下回っている。代表的なボランティアとしては、小学校・中学校・高等学校時に、学校行事として、施設を訪問したり、学校に招いたりして、障害者との交流を行ったようであった。

Table 1. 身近な障害者とスポーツ実施状況(n=38)

		家族	親族	友人・知人	近所・ バイト先	無回答	計
スポーツを している	水泳	0	1	2	1	0	4
	陸上	0	0	1	0	0	1
	バレーボール	1	0	1	0	0	2
	バスケットボール	0	0	0	0	1	1
	サッカー	0	0	2	0	0	2
	キャッチボール	0	0	0	1	0	1
	ダンス	0	0	1	0	0	1
	空手	0	0	1	0	0	1
していない		5	3	4	3	4	19
無回答		1	3	2	0	0	6
計		7	7	14	5	5	38

(2) 障害者スポーツ情報について

障害者スポーツに関するテレビ番組を「よく見る」が2名(1.2%)、「たまにみる」が70名(42.2%)、「全く見ない」が93名(56.0%)であった。「全く見ない」が2人1人の割合で存在し、残念な結果だといえる。見ている番組としては、「パラリンピック」「車椅子バスケットボール」「サッカー」、TBS系「情熱大陸」、NHK「福祉ネットワーク」「ストレッチマン」「ドキュメント番組」、NTV系「24時間テレビ」であった。

また、障害者スポーツに関する新聞記事に対して「自分から探して見る」が0名、「眼に留まったら見る」が72名(43.4%)、全く見ないが94名(56.6%)であった。新聞もテレビ番組同様、「全く見ない」が2人1人の割合で存在し、残念な結果だといえる。「眼に留まったら見る」新聞名としては、読売新聞、朝日新聞、神戸新聞、福井新聞、スポーツ新聞等であった。

2008(平成20)年度調査⁷⁾、2009(平成21)年度調査⁸⁾において、障害者スポーツに関するテレビ番組・新聞記事等を「良く見る」「たまに見る」の合計が、それぞれ92.2%、94.8%であった。今回の調査と比較するため、「障害者スポーツに関するテレビ番組を全く見ない」と「障害者スポーツに関する新聞記事に対して全く見ない」の両者に該当する学生を数えると、63名(38.0%)であった。これらのことから、約4割の「学生自らが、進んで情報を得ようとしていない」状況であり、それは増加していく傾向があると考えられる。

さらに、「障害者の種類で聞いたことのある」障害者名を複数回答させた(Table 2)。①身体障害者が162名(97.6%)、②知的障害者が160名(96.4%)、③精神障害者が94名(56.6%)、④視覚障害者が160名(96.4%)、⑤聴覚障害者が158名(95.2%)、⑥内部障害者が11名(6.6%)であった。これらの数値は、2008(平成20)年度調査⁷⁾、2009(平成21)年度調査⁸⁾とほとんど変わらない傾向を示した。身体障害者、

Table 2. 知っている障害者の種類

	2010 平成22年度 調査		2009 平成21年度 調査 ⁸⁾		2008 平成20年度 調査 ⁷⁾	
	n	%	n	%	n	%
①身体障害者	162	97.6%	162	97.0%	151	98.1%
②知的障害者	160	96.4%	158	94.6%	146	94.8%
③精神障害者	94	56.6%	82	49.1%	88	57.1%
④視覚障害者	160	96.4%	152	91.0%	144	93.5%
⑤聴覚障害者	158	95.2%	148	88.6%	142	92.2%
⑥内部障害者	11	6.6%	9	5.4%	5	3.2%
⑦その他	0	0.0%	0	0.0%	1	0.0%

知的障害者, 視覚障害者, 聴覚障害者の認知度は高いが, 精神障害者は低く, 内部障害者に至ってはほとんど認知されていないと考えられる。

(3) 障害者スポーツへの興味について

障害者スポーツについて「非常に興味がある」が9名(5.4%), 「興味がある」が64名(38.6%), 「ふつう」が76名(45.8%), 「あまり興味がない」が16名(9.6%), 「全く興味がない」が1名(0.6%)であった。「非常に興味がある」「興味がある」「ふつう」で約9割, さらに「非常に興味がある」「興味がある」と「ふつう」で2分割していると考えられる。大半の学生が興味を示すものの, 「非常に興味がある」「興味がある」と特に意識している学生は, その半数で4割強ということが考えられる。

また, 興味を裏付けることとして, 全学共通教育科目「遊びと障害」の履修状況を調査した。すると, 「履修した」が1名(0.6%), 「履修しなかった」が155名(93.4%), 「履修希望をしたが許可がでなかった」が10名(6.0%)であった。同様に, 「障害者とスポーツ」について, 「履修した」が13名(7.8%), 「履修しなかった」が138名(83.1%), 「履修希望をしたが許可がでなかった」が15名(9.0%)であった。両科目ともダブって履修することはできず, 逆に両科目とも「履修希望をしたが許可がでなかった」が5名であった。約8割強の学生が, 全学共通教育科目での「障害者スポーツ」科目に興味を示さず, また行動を起こさなかったということが, 考えられる。

一方, 「自分が知っている障害者スポーツ種目について, 最大3種目まであげる」と設問し, その調査結果をTable 3に示した。「車椅子バスケットボール」が92名(55.4%), 「バスケットボール」が51名(30.7%)と, バスケットボール系が上位を占めた。それに続く種目として, 水泳が22名(13.3%), 陸上競技(マラソンを含む)が21名(12.7%), 車椅子テニスが20名(12.0%), テニスが18名(10.8%)で, いずれも10%を超えた状況であった。上位種目は, 2008(平成20)年度調査⁷⁾, 2009(平成21)年度調査⁸⁾とほぼ同じような傾向を示した。メディアへの露出度, 全学共通教育科目「障害者とスポーツ」「遊びと障害」の履修が, これらの結果を導いたと考えられる。

同様に, 「自分が知っている障害者スポーツ大会名を最大3大会まであげる」と設問し, 調査した。「パラリンピック」が79名(47.6%), 「デフリンピック」が3名(1.8%), 「全国障害者スポーツ大会」が2名(1.2%), 「スペシャルオリンピックス」が1名(0.6%), 「車椅子バスケットボール選手権大会」が1名(0.6%)であった。パラリンピックという大会が定着した結果であるが, 無回答が100名近くいたのは残念であった。

Table 3. 障害者スポーツで知っている種目(最高3種目まで複数回答可)

種目	n	%	種目	n	%	種目	n	%
車椅子バスケットボール	92	55.4%	シッティングバレーボール	4	2.4%	アイスホッケー	1	0.6%
バスケットボール	51	30.7%	体操	3	1.8%	グランドゴルフ	1	0.6%
水泳	22	13.3%	車椅子サッカー	2	1.2%	車椅子ダンス	1	0.6%
陸上競技(マラソンを含む)	21	12.7%	車椅子バレーボール	2	1.2%	車椅子ラグビー	1	0.6%
車椅子テニス	20	12.0%	チェアスキー	2	1.2%	ゲートボール	1	0.6%
テニス	18	10.8%	ホッケー	2	1.2%	ゴールボール	1	0.6%
サッカー	14	8.4%	マラソン	2	1.2%	視覚障害者サッカー	1	0.6%
ブラインドサッカー	7	4.2%	野球	2	1.2%	視覚障害者バレーボール	1	0.6%
トライアスロン	6	3.6%				射撃	1	0.6%
車椅子マラソン・陸上	5	3.0%				スラローム	1	0.6%
スキー	5	3.0%				バイアスロン	1	0.6%
バレーボール	5	3.0%				バドミントン	1	0.6%
ボッチャ	5	3.0%				ハンドボール	1	0.6%
						風船バレーボール	1	0.6%
						卓球	1	0.6%

(4) 障害者スポーツ資格の取得について

障害者スポーツ指導員資格を取得希望するか、次のように設問し、調査した。初級スポーツ指導員資格の取得について、「強く希望している」が16名(9.6%)、「希望している」が40名(24.1%)、「希望しない」が41名(24.7%)、「わからない」が69名(41.6%)であった。また、中級スポーツ指導員資格の取得について、「強く希望している」が7名(4.2%)、「希望している」が34名(20.5%)、「希望しない」が48名(28.9%)、「わからない」が77名(46.4%)であった。資格取得希望をしているのが全体の約3割で、希望しないが同じく約3割、わからないが4割と考えられる。中級スポーツ指導員資格の取得希望者の場合は、希望しないが約3割、わからないが約5割で、全体の約2割が取得を考えていることになる。

そこで、それぞれの主な理由について、Table 4にまとめた。「強く希望している・希望している」学生は、「興味がある」「障害者にもスポーツを楽しんでもらいたい」「資格をとっておきたい」「将来に役立つ」などで積極的な理由がめだつた。「希望しない」学生は、「あまり興味がない」「教員免許をとりたい」などで消極的かあるいは他に興味があるといった理由であった。「わからない」学生は、「まず教員免許を取得したい」「どういうものかわからない」などで今の段階で決められないという理由であった。

これらから予測できることは、たとえば3年次後期に開講される「障害者スポーツ論Ⅰ」について、「希望している学生」50名ほどがまず受講を決め、あと「わからない学生」の半数程度がとりあえず受講するのではないだろうか。

大学健康・スポーツ科学科では、コース制度廃止に伴って、履修モデルを提示し、それを使っての履修を進めているが、今後もこのような状況が続くように考えられる。

したがって、情報提供のタイミングとその方法が重要となり、それが決め手で資格取得希望者数や、障害者スポーツ基幹科目の受講者数に影響を及ぼすと考えられる。

Table 4. 障害者スポーツ指導員資格取得希望別におけるその主な理由

強く希望している・希望している			希望しない		
	n	%		n	%
1	12	3.6%	1	6	3.6%
2	6	3.6%	2	2	1.2%
			3	2	1.2%
			4	1	0.6%
			5	1	0.6%
3	4	2.4%	6	1	0.6%
4	4	2.4%	7	1	0.6%
			8	1	0.6%
5	2	1.2%	9	1	0.6%
6	2	1.2%	11	3	1.8%
			12	3	1.8%
7	1	0.6%	13	3	1.8%
8	1	0.6%	14	1	0.6%
9	1	0.6%	15	1	0.6%
			16	1	0.6%
			17	1	0.6%
			18	1	0.6%
			19	1	0.6%
			20	1	0.6%
			21	1	0.6%
			22	1	0.6%
			23	1	0.6%
			24	1	0.6%
			25	1	0.6%
			26	1	0.6%
			27	1	0.6%
			28	1	0.6%
			29	1	0.6%
			30	1	0.6%
			31	1	0.6%
			32	1	0.6%
			33	1	0.6%
			34	1	0.6%
			35	1	0.6%
			36	1	0.6%
			37	1	0.6%
			38	1	0.6%
			39	1	0.6%
			40	1	0.6%
			41	1	0.6%
			42	1	0.6%
			43	1	0.6%
			44	1	0.6%
			45	1	0.6%
			46	1	0.6%
			47	1	0.6%
			48	1	0.6%
			49	1	0.6%
			50	1	0.6%
			51	1	0.6%
			52	1	0.6%
			53	1	0.6%
			54	1	0.6%
			55	1	0.6%
			56	1	0.6%
			57	1	0.6%
			58	1	0.6%
			59	1	0.6%
			60	1	0.6%
			61	1	0.6%
			62	1	0.6%
			63	1	0.6%
			64	1	0.6%
			65	1	0.6%
			66	1	0.6%
			67	1	0.6%
			68	1	0.6%
			69	1	0.6%
			70	1	0.6%
			71	1	0.6%
			72	1	0.6%
			73	1	0.6%
			74	1	0.6%
			75	1	0.6%
			76	1	0.6%
			77	1	0.6%
			78	1	0.6%
			79	1	0.6%
			80	1	0.6%
			81	1	0.6%
			82	1	0.6%
			83	1	0.6%
			84	1	0.6%
			85	1	0.6%
			86	1	0.6%
			87	1	0.6%
			88	1	0.6%
			89	1	0.6%
			90	1	0.6%
			91	1	0.6%
			92	1	0.6%
			93	1	0.6%
			94	1	0.6%
			95	1	0.6%
			96	1	0.6%
			97	1	0.6%
			98	1	0.6%
			99	1	0.6%
			100	1	0.6%

4. まとめ

2010(平成22)年度入学生から、本学健康・スポーツ科学科において、日本障害者スポーツ協会が提案していた資格認定制度カリキュラムの採用に伴い、カリキュラムの変更を行った。これらの変更は、単純に考えると、従来のカリキュラムより、障害者スポーツ関連科目で4科目減、そして活動経験で5日間(40時間)減となっている。資格取得側の学生にとれば、以前より、取得しやすくなったと考えられる。今回は、「障害者スポーツ」に対する認識調査を行い、「障害者スポーツ」教育に結びつける目的で、研究に取り組んだ。調査対象者は、166名であった。

- 1) 身近なところに障害者がいると回答した学生は、38名(22.9%)であった。また、障害者と交流するボランティアに参加した学生は、31名(18.7%)であった。
- 2) 障害者スポーツに関するテレビ番組を「よく見る」「たまに見る」学生が72名(43.4%)であった。また、障害者スポーツに関する新聞記事に対して、「眼に留まったら見る」が72名(43.4%)であった。
- 3) 障害者スポーツについて「非常に興味がある」「興味がある」が73名(44.0%)であった。また、自分が知っている障害者スポーツ種目は、車椅子バスケットボールが92名(55.4%)、バスケットボールが51名(30.7%)、水泳が22名(13.3%)、陸上競技(マラソンを含む)が21名(12.7%)、車椅子テニスが20名(12.0%)、テニスが18名(10.8%)であった。さらに、自分が知っている障害者スポーツ大会名は、パラリンピックが79名(47.6%)であった。
- 4) 障害者スポーツ指導員資格の希望状況は、初級スポーツ指導員資格を「強く希望している」「希望している」が56名(33.7%)で、中級スポーツ指導員資格を「強く希望している」「希望している」が41名(24.7%)であった。主な理由は、「興味がある」「障害者にもスポーツを楽しんでもらいたい」「資格をとっておきたい」「将来に役立つ」などであった。
- 5) 資格取得を希望しない学生の理由は、「あまり興味がない」「教員免許をとりたい」などであった。また、資格取得がわからない学生は、「まず教員免許をとりたい」「どういうものであるかわからない」など、今の段階で決められないといった状況であった。
- 6) 今後、情報提供のタイミングとその方法が重要となり、それが決め手で資格取得希望者数や、障害者スポーツ基幹科目の受講者数に影響を及ぼすと考えられる。

5. 参考文献

- 1) 永田隆子, 保井俊英, 田中美紀, 藤原進一郎, 「本学健康・スポーツ科学科における障害者スポーツ指導者資格取得制度と課題について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **50**. 45-54 (2002).
- 2) 保井俊英, 永田隆子, 田中美紀, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導員資格取得者の現状について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **51**. 49-55 (2003).
- 3) 保井俊英, 永田隆子, 田中美紀, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導員資格取得者の現状について(2)」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **52**. 75-83 (2004).
- 4) 保井俊英, 永田隆子, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格申請について—3年間の指導実績—」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **53**. 51-58 (2005).
- 5) 保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 藤原進一郎, 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格取得者のための指導経験について」, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **54**. 21-28 (2006).
- 6) 保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 藤原進一郎, 『「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員」資格取得者の意識と指導実績について』, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **55**. 107-113 (2007).
- 7) 保井俊英, 永田隆子, 濱屋桃子, 三上真二, 『「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて—指導者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためには』, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) **56**. 127-131 (2008).
- 8) 保井俊英, 永田隆子, 三上真二, 『「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて(2)—2年分の調査から—』,

2010 年度入学生における「障害者スポーツ」の認識について

武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) 57. 75-81 (2009).